

グルマーイ・チッドヴィラーサーナンダについての熟考

私の秘かな願い

スワーム・イーシュワラーナンダ

1991年にグルマーイが2度目の教えの旅で日本を訪れたとき、グルマーイとシッダ・ヨーギのグループの人たちと共に、古くからの精神的な都である京都市内と、その周辺にある仏教寺院をいくつか訪ねる機会がありました。私は1970年代の初めにその中の一つの寺で自分自身の精神の旅を始めたので、私のグルであるグルマーイと共に再びそれらの寺院を訪ねることは、とりわけ心が躍るものでした。

それぞれの寺で、グルマーイはその寺の規則と修行について尋ね、一つ一つの寺の伝統を大きな敬意を持って尊重しました。ある寺では楽しい慣習として、とても楽しく笑いながら入り口で仏陀の石像に水を掛けました。別の寺では、中央に座している仏陀の周りを一周してささげ物をしました。また別の寺では、静かに座って瞑想したり、シッダ・ヨーガのマントラをチャンティングしたりしました。私は、古来の文化を探究し、私たちを啓発するために質問するグルマーイの率直な研究心を見るのがとても好きでした。

私たちが訪問したある寺は、私が4年間日本に住んでいた頃に特に好きだった寺でした。その寺は多くの大きな仏像でいっぱいでした。その中の一つの仏像を黙ってかなりの間見つめてから、グルマーイは住職に言いました。「この仏陀（ぶっだ）は、他のものとは違いますね」

「どういうことですか」と僧侶は聞きました。

グルマーイは、他の仏像は皆真っすぐに座っているのに、この仏像はほんのわずかに前かがみになっているようだと説明しました。僧侶は、グルマーイが気づいたことを認めて言いました。「ええ、確かにそうです。この

仏陀は、人類を向上させるためにこの世に何度も帰って来ることを誓いました。ですから衆生の嘆願を聞くために前かがみになっているのです」

私は、グルマーイのこの仏像のわずかなしぐさを見逃さない観察力に驚きました。そして、過去にこの寺に何度も来ていながら、どうして前かがみになっていたことに自分は気がつかなかったのかと思いました。

明確かつ微細な知覚でものを見るというグルマーイからの教えは、この訪問の中で驚くべき形で解き明かされ始めました。次に、素晴らしい光栄と喜びを持って、私がかつて学んだ大徳寺という歴史的な寺院にグルマーイと同行のグループを案内しました。今日では、大徳寺は大小合わせた多くの寺が集まった広大な寺院群です。中でも一番古い寺の一つに入り美しい庭を見ていると、住職が現れ私たちをお茶に招いてくれました。彼はテレビにも出演したことがあるとても有名な僧侶で、またユーモアのセンスでも知られていました。もしかしたら、このユーモアのセンスが次に起きた出来事を引き起こしたのかもしれない。

茶室に座ると、私は僧侶にグルマーイの本の1冊を手渡しました。すると僧侶は英語で、私がこのグループのリーダーかと尋ねました。私が「いいえ」と言おうとしていると、グルマーイは笑いだし、手のしぐさとうなずきで、私がこのグループのリーダーだと示したのです。

僧侶は、髪をそり落としたグルマーイの写真が載っている本の表紙を見て、それから、その時は長い髪にしていたグルマーイを見ました。次に完全なはげ頭だった私を見て、またグルマーイの方に目を向けました。もう一度本の写真を見ると、彼の顔に大きな笑みが広がりました。そしてとても優しく、私たち一人一人にお茶を用意してくれました。

時々、私は目の端からグルマーイをちらりと見ました。彼女は一言も言わずに座り、静寂と禅の伝統で高い達成と見なされる「純粹な空（くう）」を体現していました。その姿とその時の感動は、今も私から離れません。

お茶がふるまわれている間、グルマーイはずっと無言でしたが、私はグルマーイの行為の力に支えられているのを感じました。グループを代表して

瞑想について僧侶と話していると、長年の間バーバやグルマーイから学んだすべてのことに対してこの上ない感謝の気持ちを感じました。

帰る時間になると、僧侶は私たちに別れを告げました。私たちが門に向かう庭の小道を歩いていると、寺の鐘が一斉に鳴り始めました。見ると、住職が自ら玄関先に立ち、笑ってさよならと手を振りながら鐘を鳴らしていました。その鐘の響きは、あたかも彼がグルマーイにこう言っているようでした。「ああ、私にはあなたのことがよくわかります。一緒に時を過ごせて楽しかったです。来てくださってありがとう」

その時起こったばかりのことについて振り返ったとき、禅の文献にはこのような、言葉を使うことなく、しばしば型破りな方法でお互いを認め合う師同士の出会いについてたくさん書かれていることを思い出しました。あの日私の目の前で、グルマーイはこの伝統に滑らかに入り、それと完璧に調和して共に流れていたのです。

その日はまだ終わりではありませんでした。お茶の体験の後で、グルマーイは私のかつての先生が住んでいる寺に案内するようと言いました。私はその寺の方向を指さして、私の先生は今病気で私たちに面会することはできないでしょうから、多分行っても無駄でしょうと言いました。

グルマーイは私の言葉を見捨てるかのように、その寺の方向に歩き出しました。寺の戸口まで来ると、お付きの人が、僧侶はもう余命が長くはなく、残念ながら誰にも会うことができないと言いました。グルマーイは贈り物がしたいことを説明し、セーヴァイトの一人にショールを持ってくるように言いました。これを聞いて、私は総毛立ちました。私は何年もの間、日本に帰って私の先生に美しい紫のパシュミナのショールをささげ、精神の道を始めさせてくれたことに感謝したいと夢に描いていたのです。

セーヴァイトが戻ってくると、彼女は白と黒と紫の3枚のパシュミナのショールを持っていました。グルマーイは黙ってショールを少しの間見ました。そして紫のショールに手を伸ばし、祝福と共にそれを渡しました。

私のかつての先生が、彼の人生の終わり間際にシッダからの祝福を受け取り、私はとても幸せでした。もちろん、グルマーイはなぜ知っていたのか私には不思議でした——私の密かな願い、お茶を用意してくれた僧侶のすてきなユーモア、ほんのわずかに前かがみになって衆生の嘆願を聞いている仏陀。私にとって、そこにはこれらすべての出来事を結ぶ見えない糸がありました。

そして、わかり始めたのです。それは静寂でした。内側の静けさと開いた心の空間の中で、グルマーイは聞くのです。彼女はその瞬間に必要とされていることに耳を傾けます。彼女は人の心に耳を傾けます。内側の静けさと開いた心の空間から、全知のシャクティ、つまり私たちすべての中に存在する神聖な力が、何を促しているかに耳を傾けます。このようにして、グルマーイの行動は常に高い英知と調和しているのです。

寺院への訪問は、とても自然発生的な形で行われました。それでも、その一日を振り返ってみたとき、すべてが川のように完璧に流れていたことがわかりました。

古代の仏教の文献には、「目覚めた者」である仏陀は、すべての行動としぐさを通して教えを授ける、とあります。グルマーイと共に京都の古い寺院を訪ねることで、私は彼女の言葉、行動、そして内側の静けさにある至高の知識を体験しました。そしてこれは、この世界での新しい在り方に私を目覚めさせてくれたのです。

